



彦島八幡宮社報
第 54 号



日清日新日進

宮司 柴田 宜夫

「日々清々しく新しく、そして、いつも未来志向で前向きに進みます。」

平成三十年の清々しき新年を寿ぎ、謹んでお慶びを申し上げます。さて、人というのは体という船に、「魂(たましい)」が乗かっているものなんでしょう。船が安定しないと、つまり、健康でなければ、船は動きません。魂とは、心の働きをつかさどるものだと考えられています。したがって、魂の修行と云ったら少し大げさですが、心を磨(みが)かなければ、船の舵(かじ)取りを誤(まち)ってしまいます。身も心も健康でなければ、沈没(しめつ)したり、座礁(ざせう)したりと、順風満帆(じゆんぷうまんぱん)な航海(かいかい)ができなくなるのではないのでしょうか。二千年前の中国の医学書である「黄帝内経(こうていだいけい)」には、「季節に従え、冬には冬の物を食べよ、夏には夏の物を食べよ」と記されています。夏目漱石も晩年には、「則天去私(そくてんきよし)」という言葉を残されています。大自然に身を委ねて、私利私欲(しりしよく)をかなぐり捨てて生きていくことの大切さを、さとされています。私共日本人は、万物万象(ばんぶつばんしょう)、いたるところに神仏(かみぶつ)を見いだして、恐れ敬(おそれかしやう)、感謝(かんしゃ)の心を忘れませんでした。「季節に従え」ということは、感謝(かんしゃ)の心を忘れないということではないでしょうか。

船は、「水」がなければ航海(かいかい)ができません。穏やかな毎日、目に見えない沢山の「お陰様(かげさま)ですし、大切な物が、ひっくり返らないように、お互い手を携えて、「お陰様(かげさま)という謙虚(けんこ)な心で支えあわなくてはなりません。心身ともに健康であり続けるためには、「感謝(かんしゃ)の心」と「お陰様(かげさま)という謙虚(けんこ)な気持ち」が大切な気がします。昨今は、日本人の心情(こころ)が、着実に毀損(きそん、こわれること)し、衰微(すいび、衰えていること)しつつあるような気がします。さらに、孝行(こうぎやう)や思いやりといった、人生に必要な重石(おもし)が失われ、軽(かろ)く扱(あつか)われているような気がしてなりません。日本人が特に大切にしていた徳目(とくもく)は、「正直(しやうじき)です。「正直者(しやうじきもの)の頭(かぶ)に神宿(かみやどり)る」という言葉(ことば)もあり、ありのままの姿をお写(うつ)しにされるのが神様(かみさま)ですから、神様(かみさま)が好まれる徳目(とくもく)でもあるわけです。実は、「正直(しやうじき)の「正(ただ)は、誠(まこと)といちづ」に生きることであり、「直(ただ)は、悪(わる)を反省(はんせい)し、少しでも善(よ)き方(かた)に向(む)かおうと努力(なっりく)すること」であります。

神社(じんしゃ)神道(しんどう)の信仰(しんぎやう)の三本柱(さんぼんちゆう)は、宮司(みやじ)プレス(press)の既刊(きかん)号(ごう)きかん(ごう)にも記述(きじゆつ)されたことがありますが、「自然(しぜん)を大切に、人と人のつながりを大事(だいじ)にする、前向き(まへむき)に人生(じんせい)を楽しむ」ということです。感謝(かんしゃ)の心を忘れずに、自然(しぜん)を大切に、お陰様(かげさま)という謙虚(けんこ)な気持ち(こころ)で人と人のつながりを大事(だいじ)に暮(く)らす、まさに、日々、「よみがえり、生まれかわり、清々(せいせい)しく、新しい、心身(こころみ)ともに健康(けんこう)な暮らし」です。そして、誠(まこと)といちづに、悪(わる)を反省(はんせい)し、少しでも善(よ)き方(かた)に向(む)かおうと努力(なっりく)する、前向き(まへむき)に人生(じんせい)を楽しむ、これこそ、麗(うつく)しい神社(じんしゃ)神道(しんどう)の三本柱(さんぼんちゆう)の姿(すがた)であります。

この新しい年も、皆様(みなさま)方(かた)、お一人(ひとり)お一人(ひとり)の誠実(まことまこと)な働きかけ、誠(まこと)一途(いつ)な生活(せいかつ)が生(な)かされる社会(しゃかい)が構築(こうきやく)されますように、心(こころ)からお祈(いの)り申し上げます。「日清日新日進(にっせい にっしん にっしん)」、日々(ひび)清々(せいせい)しく新しく、そして、いつも未来(みらい)志向(しやうきやう)で前向き(まへむき)に進(すす)みますように、幸(さい)多(た)かりし日々(ひび)でありますように。

八幡宮からのお知らせ

どんど焼き 一月十四日(日) 執行(ぎやう)午前十一時頃(ごぜんじゆんじゆん) 忌火(いひ)火入(ひいれ)式(しき)

※荒天(あらかん)の場合(ばあひ)は一月二十日(日)に順延(じゆんえん)します。

正月飾(しょうげしき)りはみかん橙(だいだい)を外(そと)してご持参(もってまわ)下さい。

執行(ぎやう)後は来(らい)年(ねん)まで受付(うけつけ)致(いた)しませんので、予(よ)めご了(りやう)承(じやう)下さい。

鏡餅(かがみもち)・ビニール袋(びにールぶくろ)・結納品(むすなひな)・人形(にんぎやう)・仏具(ぶつぐ)・民芸品(みんげひん)等は一切(いっけい)お断(ことわ)りいたします。



下関市最南端の彦島総氏神

彦島八幡宮の由緒

◇略記

当宮は平治元年(二五九)十月十五日、本当開拓の主祖・河野通次こうのみちつぐ自ら祭主となり宇佐神宮より御祭神を勧請、祭祀なされました。御祭神は應神天皇 相殿に仲哀天皇 神功皇后 仁徳天皇をお祀りしております。一名灘八幡と言っただけに宮の沖合を通過する船は必ず「半帆」の札をとつたと云われる事から造船、漁業関係者の崇敬が厚く、又、安産の神として別名「子安八幡」と崇められて併せて武神、文化神、生産神として御霊験あらたかな神様であります。尚、秋の例大祭「十月二十一日に近い土・日曜日」には八百五十八年伝来の無形民俗文化財「サイさい上りあがりしんじ神事」があり由緒の深さを示しております。

◇彦島十二苗祖びょうそ

当宮創祀者である河野通次は保元元年(二五六)保元の乱(後白河天皇と崇徳上皇間の皇位継承問題と、藤原忠通と藤原頼長間の摂関家の内紛)によって源氏と平氏を巻き込んだ権力争い)に敗れた後、園田覚、二見右京、小川甚六、片山藤藏、柴崎甚平を率いて彦島の地に敗走し、その二十有余年後には、植田治郎、岡野将監、百合野民部、和田義信、登根金吾、富田刑部が来島して総勢十二名の将を中心に二族郎党が農耕漁釣に精を出し彦島を開拓しました。以来「彦島十二苗祖」と称えられています。今日も末裔の方々が、「サイ上り神事」をはじめとする伝統神事を継承されています。

◇光格殿と彦島八幡宮の発祥

保元二年(二五七)十月のある日いつもの如く沖に出て漁をしていますと一天俄にかき曇り末甲の方角の海上に紫雲たなびき海中より日月の如く光輝く物があるのを見て、通次等は不思議な思いで網を打って引き上げるとそれは一台の明鏡でありました。しかも鏡の裏には八幡尊像が刻まれていたのです。通次等は大いに喜び、之は我ら二族の護り本尊であると、海辺の一小島(舞子島)の榊に一旦鏡を移し、その後祠を造営して鏡を納め光格殿と命名しました。これが当八幡宮の発祥であります。

又舊記に海底より光り輝く物があり河野一族等鏝にて之を突きし八幡尊像の左眼がささりて賜りたりと云々という口伝も残っております。



※写真は戦後のサイ上り神事の様子です。



宮司プレス総集編

※119号~127号(要点抜粋)を総集編としてお届けします。
全文をご覧になりたい方は八幡宮ホームページへアクセスしてください。

第一一九号(平成二十八年十二月二十八日)

第二一〇号(平成二十八年十二月三十一日)

第二二一号(平成二十九年二月二日)

中国の王朝、国の名前が変わるたびに、「載(さい)」から「祀(し)」へと変遷したことを記載しました。日本で使われている「年」、これは、中国古代王朝の一つ、武王(ぶおう)が建てた「周」という王朝から用いられたそうです。この「年」は、稲のこともあり、私共日本人の折節、その季節の移ろいは、まさに、お正月から、稔りの秋の収穫までの歩みなのです。旧暦の十二月の中の卯の日、古来、新嘗祭が行われていました。この新嘗祭は、天皇陛下みずから、天神地祇、全ての神々へ、新穀を捧げられ、また、親しく陛下自らお召し上がりになる、大切な重き祭儀です。「霜月」は、「食物月(おしものづき)」という説もあります。私共は、神様から命を戴いて、生かされて生きているのです。まさに、「載」です。神を敬い、祖先を尊ぶ、敬神崇祖の日々の暮らしが大切です。その日々の営みが「祀」です。そして、「年」は、稔り、「稔(ねん)」にも通じるのですから、やはり、豊かな秋の収穫を迎えるという大目標を達成すべく、日々つとめる事が肝要です。

当宮の正面の鳥居は、紀元二千六百年を奉祝して、建立されました。昭和十五年、七十六年前のことです。鳥居の柱の右側に日光照萬民(にっこうしょうばんみん)、左側に月色清人心(げつしよくせいじんしん)と刻まれているのです。朝に祈り、希望を持ち続けることを誓う、そのことが、「日光照萬民」なのです。そして、漆黒の夜空に浮かぶ月は、私共の心の暗闇、陰りを取り払う、さやけき光でもあります。まさに、清め祓いです。心靜かに一日を振り返りつつ、感謝を捧げる、これが、「月色清人心」です。

来年、平成二十九年の干支(えと)は、「丁酉(ひのと)」で、とり年です。「丁」は、釘を横から見た象形文字とされています。「酉」は、釘の頭の部分、「一」は、釘の胴の部分を示しています。また、「一」の字は伸びすぎた草木を刈り取る象徴ともされており、草木が茂りすぎると日光が遮断され成長のさまたげになることから、わずらわしいことを払うという意味があるとされています。「酉」は、十二支の中では、「とり」の意味としてもちいられていますが、鳥(鶏)に結びつく字ではありません。字体は、酒を盛る器(壺)の象形で、転じて酒の意味にも用いられます。酉の字は、酒の壺の中で麹が発酵する様子から、万物の成熟、さらに、そこから新しいものの「実り」を表すともいわれています。「酉」の成熟した状態、優位性を保ちつつ、新しいものを造りだす「実り」成長につながるのではないのでしょうか。

「とり」といえば、鶏です。鶏には、目だけで物を追うことが出来ないという特徴があります。眼球運動ができないのです。鶏が常に首を動かして周りを見渡しているのはその為だそうです。また、鶏は、警戒心を強く持ち、常に周囲を見渡していることから、「魔よけ」の意味を持つといわれます。屋根や塔の上に取り付けられている「風見鶏」は、風光計としてよりも「魔よけ」の為であるといわれます。

「辰巳天井、午尻下がり、未辛抱、申酉騒ぐ。戌笑う、亥固まる、子は繁栄、丑つまずく、寅千里を走り、卯跳ねる」といわれます。平成二十九年、どのように騒ぐのでしょうか。酉年ですから、鶏にあやかり、「魔よけ」で、良い方向に導いて欲しいものです。

毎年、その年の干支にちなんだ書初めをしています。「尊神」。尊という字は、位の高い方が、お使いになる「酒器」のことで、転じて尊ぶという意味合いになったそうです。「そんな」と読みます。この言葉は、辞書に掲載されていまして、神様を尊ぶということですが。

「尊徳」。鶏には、「五徳」がそなわっているそうです。これは、後漢の思想家、韓嬰(かんえい)という方が仰いました。「とさか」、これは、「文」を意味します。「蹴爪」、これは、「武」です。「文武両道」なのです。それから、敵にたいしては、「勇」の気を奮い戦います。餌を見つけたら、仲間知らせる、思いやり「仁」です。そして、何より、「鶏鳴(けいめい)」にして、「時を守り夜を失わぬ」この物堅さは、「信」だと仰るのです。「文」「武」「勇」「仁」「信」の五徳なのです。中国春秋時代の呉の国の名君と謳われた闔閭(こうりよ)という王様は、国に一番大切なのは、武力や富ではなく、徳が一番大切だ、「徳を念(おも)いて怠らず、それ敵すべけんや」と諭されました。伊勢神宮の神主さん、度会延佳(わたらい のぶよし)さんも、「人は神様から神性を戴いてうまれてきた、その本性を損なうようなことをしてはいけない」と戒めていらつやいます。

その本性とは、吉田松陰先生の仰る「身清浄心正直」で、徳義を重んじる生活が大切です。損か得か、これは、浅はかな「人間のものさし」、そうではなくて、嘘か誠か、真実か偽りか、正義か邪悪かという「神様のものさし」の生活こそが、「尊徳」ではないでしょうか。

当宮の旧参道の鳥居の柱に、「好古尚源(こうこしょうげん)神斎心浄(しんさいしんじょう)」と刻まれています。「古き良き伝統文化を学び尊びつつ、いつも神信心の生活を心掛ければ、心はいつも清らかかで明るい暮らしであるものだ」という意味に解釈します。「尊神」「尊徳」で、明るく豊かな暮らしでありますように。

第二二二号(平成二十九年三月十一日)

三月のことを「弥生」といいますが、「草木、いやよい、生い茂る月」が、つまつて「やよい」となったそうです。また、「春」という字の甲骨文字は、桑の芽が伸びきつた形をしているようであります、命がまつすぐに勢いよく張り伸びる季節なのです。「三寒四温」の毎日、折節の移ろいは、緩なようです。「三寒四温」という言葉、皆さまご存知ですか。三日寒い日が続いて四日目ぐらいから温かくなる、物事が少しずつ良くなっていく事の例えでもあります。私は、寒を感じ、温を恩にかえた「三感四恩」を生活の目標に掲げています。我々は目に見えない大きな神様のお力、大自然の恵みによって生かされて生きています。感謝の心を忘れてはなりませんし、その当たり前の事を謙虚に感謝し感動をし、そしてその感動を感性として前向きに取り入れて、身につける、涵養、これが「三感」です。そして四つの恩に報いる事が出来るように日々生活をする、つまり神様・親・師匠(人生の先輩等・地域社会)にながった生活をする、これこそが、「三感四恩」だと思っております。

働き方改革が提唱されています。仕事の生産性向上と効率化により、働き過ぎを是正して労働時間の削減を図ろうという論議です。仕事も生活も含めて心の豊かさが満たされる「幸せづくり」のための、「生き方の改革」なのだそうです。前述した「三感四恩」の生活は、「自然を大切に、人と人のつながりを大事にする、前向きに人生を楽しむ」という神社神道の三本柱そのものです。さて、「イノベーション」とは、物事の進歩ではなく、「何が良いか」が、変わることだそうです、自分のなかに、「どうしてもこういうことがしたい」という強い思いがある人が起こすのだそうです。何事も、「雨奇晴好」、降るもよし晴れるもよしという、とらわれない心持で、「センス オブ ワンダー」、感性を研ぎ澄まし、「三感四恩」の生活で、「日々是好日」、穏やかな日々でありますように。

第二二三号(平成二十九年五月七日)

中国の黄河中流に、その名も「竜門」という険所がありました。後漢書には、この竜門という急流を登りきった「鯉」は、竜になるという伝承がしるされています。困難ではありませんが、そこを突破すれば立身出世が出来る、そのことを「登竜門」というのは、この伝承にもとづいています。

我が国は、先の大戦で国破れて山河在り、七十二年を迎えました。軍国主義から民主主義へパラダイム(枠組み、体制)を百八十度転換しました。さらに、オイルショックでは、世界一の省エネ国家にモデルチェンジすることに成功しました。日本人は、危機に直面し、そこを登竜門として、国の形を大胆に変えて乗り切ってきたのです。

実は、現在、日本は、大震災時代の真ただだ中にあるそうです。平成になって気象庁が命名した大地震は十四回、これほどの地震活性期は有史以来、数えるしかないそうです。しかも、活性期の終焉、ピリオドは、首都直下地震と南海トラフ地震の発生なのだそうです。しかしながら、大自然は、時には恐ろしい猛威を振りますし、我々人間を容赦なく苦しめます。しかし、私たちが生かしてくれているのも、またこの大自然にはほかなりません。「大量生産、大量消費、大量廃棄」の現代社会、「ないものねだり」から、「あるものさがし」、「成長社会」から、「成熟社会」へ舵(かじ)を切り、ありがたいという感謝の心と、おかげさまでという謙虚な気持ちで支え合う、「共生社会」を目指したいものです。

第二二四号(平成二十九年七月四日)

御神殿の北側と東側の紫陽花の花が、水色やうす紅の花を咲かせて色鮮やかです。アジサイは、かつての日本では、あまり人気のある花ではなかったそうです。それは、白から赤や青に次第に花の色を変えていくのが特徴で、「七変化」の別名があり、心変わり、無節操に通じるとされていたからだそうです。アジサイの色が変わるのは、細胞に老廃物がたまる、いわゆる老化が原因だそうです。花の寿命が極めて長いから、色の変化をたっぷり楽しむことができるのだそうです。アジサイが、老化現象で美しく花を咲かせているわけですから、長寿社会でもありますので、加齢とともに、別の魅力を発揮したいものです。

民俗学者であり国文学者、歌人の折口信夫さんは、日本古来のしきたりや年中行事を「生活の古典」と呼ばれました。生活の古典である年中行事を伝え守り継承することが、日本の力ともなりえるのではないのでしょうか。吉田松陰先生は、「備えとは武器にあらず 敷島の大和心」と諭されています。大和心とは、大なる和らぎで、和の心をもつて、むつみあう、日本人のオプリージユです。フランスの随想家であるモンテニユーさんも、「少しも他人のために生きない者は、ほとんど自分のためにも生きていない」という言葉を残していらつしやいます。地域社会の一員として、公のために生きる、これこそが、大和心だと思います。

中庸の道は、「敬神」という日本人の道徳、「生活の古典」といふべきしきたり、年中行事の継承、相互扶助相互規制の「大和心」を守り伝えることだと考えます。日本人の伝統的信念の別名である神社神道を伝えること我々神職の使命は、日本の歩むべき中庸の道であることを信じて、しっかりと襟を正しておつとめして参ります。

● 第二二五号(平成二十九年七月十八日)

「お中元」の季節となりました。この「お中元」の由来は、古代中国の道教で中元(七月十五日)の行事と仏教のお盆の行事が結びつき、受け継がれているものです。私は、「お中元」のお品を頂戴しましたら、お礼状を認めるよう心掛けています。この折節のしきたりは、「生活の古典」でありますから、大切にしたいものです。

唐の国の第二代皇帝である太宗の言行録である「貞観政要」には、リーダーは、三つの鏡を持たなければならぬと書かれています。それは、「銅の鏡」「歴史の鏡」「人の鏡」なのだそうです。「銅の鏡」は、明るく元気で楽しそうな顔しているかをチェックする鏡、身なりを正すための鏡。「歴史の鏡」は、過去から学ぶということです。「人の鏡」は、厳しく諫めてくれる部下を持つということです。亡くなられた渡部昇一先生は、「民主主義には横の民主主義と縦の民主主義がある」と仰いました。横の民主主義とは、今この社会に生きている我々のことで、太宗のいう「銅の鏡」「人の鏡」にあたるのだと思います。縦の民主主義は、遠い祖先からの歴史で、「歴史の鏡」です。社会は、今生きている私たちの判断で物事を決めるのではなく、遠い祖先からの歴史や未来に向けた先見力も併せ持つ改革をすすめるなければならないというのが、渡部昇一先生の提唱された「横と縦の民主主義」です。まさに、それは、古きをたずねて新しきを知るといって「温故知新」ではないでしょうか。後醍醐天皇さまは、「みな人の心をみがけ ちはやふる 神の鏡のくもるときなく」という御製を残していらつしやいます。神様の鏡が、くもるときがないように、我々の心の鏡もそうありたいものであると詠まれています。心の鏡をとぎすまして、三つの鏡を持ちつつ、輝かしい未来であるように、つとめたいものです。

● 第二二六号(平成二十九年九月八日)

寺田寅彦さんは、「日本は、厳父慈母の配合よろしき国柄」と仰いました。時には、テレビに映し出される神様も仏様もないような痛ましい爪痕を残す、まさに厳父です。しかし、花鳥風月、慈しみあふれる姿を見せてくれる、慈母、いずれも、私どもが生かされているこの大自然にほかなりません。その天変地異の備え、我々にできるのは、三つの備えです。「物の備え」、そして、「行動の備え」、さらに、「心の備え」なのだそうです。

平安時代の健保一年に、宮中の行事・儀式・政務などの故実作法全般にわたり記され、後世の準則となった「禁秘抄」を御著された第八十四代順徳天皇様は、「神事を先にし他をあとにする。朝夕に敬神の心をゆるがせにすることはない。かりそめにも、神宮と内侍所に足を向けてやすむことはい」という有名な言葉を残していらつしやいます。その大御心に添えるよう、日々、月毎、季節毎のお祭りに、襟を正して、「大難は小難、小難は無難に」と祈る、「心の備え」を大切にせねばと、思いを新たにしています。

中国の古い書物「論衡」に、「五日一風、十日一雨」とあります。天下泰平の世の中を例えるならば、五日に一度、穏やかな風が吹き、十日に一度、静かな雨が降る、そういう世の中のだと書かれています。「心の備え」である敬神生活を心がけられて、「五日一風、十日一雨」の天下泰平でありますように。

● 第二二七号(平成二十九年十月三十日)

幕末の歌人である橘曙覧さんは、「たのしみは」から始まる「独楽吟」いう和歌集を残されています。そのなかに、「たのしみは 神の御国の 民として 神の教へを 深く思ふとさき」というのがございます。日本人には、悠久の歴史のなかで、意識していかなくとも、美質というものがそなわっているところ、その美質とは、一つには、万物万象、いたるところに神仏を見いだして、恐れ敬い、感謝の心で生活してきました。二つ目は、小さき物や弱い立場にある人々を思いやる、大切にすることを忘れたこと、

さらに、正義・正直という徳目を大事にして、人として尊ぶべきモラルである倫理道徳を重んじたことです。この美質でもって、様々な国難を乗り越えてきたのではないのでしょうか。しかし、昨今は、日本人の心情が、着実に毀損し、衰微しつつあるような気がします。さらに、孝行や思いやりといった、人生に必要な重石が失われ、軽々しく扱われているような気がしてなりません。

さて、西洋は、「霸道」、そして、東洋は、「王道」であるといわれます。霸道とは、自分の利益のために、強い権力を発動する政治です。それに対して、「王道」は、人として尊ばねばならない仁義道徳によつて、物事を解決しようとする政治のことです。近隣諸国は、東洋であるのに、「霸道」となりつつあります。私共は、本来の日本人の美質である、「感謝の心」「思いやり、慈しみ」「正義道徳」を取り戻しながら、ひとりひとりの誠実な働きかけが、十分に生かされる社会を構築しなければならぬのではないのでしょうか。そのためには、これからも、一つ一つのお祭りを厳肅に御奉仕申し上げながら、「神明奉仕」「清掃奉仕」「社会奉仕」、神職の使命を全うせねばと思いを新たにしています。

一日 初太鼓 歳旦祭
 *新年の幕明けを告げる大太鼓を宮司自ら打ち、総代参列のもと、皇統の繁栄、五穀豊穣に併せ氏子崇敬者のご加護を祈念する最初の祭祀を斎行致しました。

三日 元始祭
 *天皇陛下御自ら宮中三殿【賢所(かしこころ)、皇霊殿、神殿】において皇位の始源を祝し親祭あそばされました。当宮においても皇位を祝寿する祭祀を厳修致しました。

七日 人日節句祭

十二日 防衛省海上自衛隊敷設艦むろと艦長以下乗組員昇殿参拝

十五日 どんご焼き

睦月(二月)

社務日誌抄
 (本宮祭典諸行事厳修報告)
 平成二十九年一月〜十二月



節分祭

三日 節分祭追儺式
 *悪神邪気、不幸を追い払い、氏子崇敬者の招福と平安な生活を祈念申上げました。神事終了後は、境内特設花道に於いて福豆福餅が撒かれ賑わいをみせました。

十一日 紀元祭建国奉祝祭
 *我国の初代天皇である神武天皇が橿原宮で即位された古えを偲び、建国創業の御神徳を景仰し、皇室国家の弥栄を祈念申上げ、当宮神前を通して橿原神宮を遥拝致しました。

建国記念日奉祝パレード

十七日 祈年祭
 *農耕祭儀の中でも重儀」とし「こいのまつり」とも言い、本年の五穀豊穣を祈念申し上げる重要農耕祭祀を厳修致しました。

十八日 横浜DeNAベイスターズ 必勝祈願祭

如月(二月)



夏越祭

三日 上巳節句祭

二十一日 春季祖霊祭並びに 神道会総会
 *家の宗旨が神道の方の合同の先祖慰霊祭。「自然をたたえ、生物をいつくしむ日」という春分の日々の意義を継承し、自然万物に感謝の祈りを捧げる祭儀を斎行致しました。

二十九日 高尾神社敬神婦人会 昇殿参拝

弥生(三月)



秋季例大祭

一日 勸学祭
 *今春めでたく入学されました新一年生の児童生徒の皆様の学業成就・交通安全・無病息災を祈願する新入学奉告祭を月次祭に併せ厳修致しました。

四日 彦島八幡宮維蘇志会昇殿参拝 並総会

二十三日 彦島地区戦没者慰霊祭
 *日清・日露戦争から大東亜戦争において、国のため郷土のため家族のため国の御盾となり犠牲となられた彦島地区出身の四百五十一柱の御英霊の御前にて慰霊祭を雨儀により斎行致しました。

二十九日 昭和祭
 *激動の日々を経て、復興を遂げた昭和の時代を顧み、我国の将来に思いを馳せ、昭和天皇陛下のご聖徳をお讃え申し上げますとともに、ご皇室の弥栄と国家の繁栄を祈念申し上げます。

卯月(四月)



皐月(五月)

五日 立夏更衣祭並びに端午節句祭
 七日 彦島八幡宮敬神婦人会昇殿参拝
 並総会



十五日 小
 熊野神社
 白木阿蘇神
 社総代会昇
 殿参拝
 二十六日
 山口芳英氏
 手水舎龍口奉納奉告祭
 彦島八幡宮奉賛会昇殿参拝
 並理事総会

水無月(六月)

二十九日 第一回茅の輪奉製作業
 三十日 水無月大祓式
 *カヤとヨモギが神秘的な除災の力を有する
 という故事に倣い、氏子奉賛会の皆様が奉製
 した「茅の輪」を潜り、上半期の罪穢れを人形
 にうつし、祓の神事を厳修致しました。

文月(七月)

六日 伊勢市 皇學
 館大学館友会山口
 県支部昇殿参拝並
 総会
 二十七日 第二回茅
 の輪奉製作業



二十九日 夏越祭前夜祭・菅拔神事
 *当宮では水無月の大祓に加え夏越の大祓も
 執行しています。カヤとヨモギで奉製した茅の
 輪を潜り、分魂を宿らせた人形を焚き上げる
 古式。罪穢れを祓い清めました。当宮では水
 無月晦日より一ヶ月の間に計二度奉製致しま
 す。

三十日 夏越祭御神幸祭
 *御祭神の御霊を奉じた御神輿が氏子地域
 を中心に陸上海上を隈なく御神幸致しまし
 た。

葉月(八月)

十一日~十六日 神道家中元祭齋行
 *上元(八月十五日)中元(七月十五日)下(十
 月十五日)を先祖供養の日と定めた「みたま祭
 」の故事に肖り、日本人に親しみある盆行事の
 一環として毎年齋行致します。
 十二日 防衛省海上自衛隊第三三サイ
 ル艇隊おたか しらたか艇長以下乗
 組員昇殿参拝

長月(九月)

二十三日 秋分祭秋季祖霊祭
 *「祖先を敬い、亡くなられた人々を偲ぶ日」
 という秋分の日になみ、日毎ご加護をいただ
 いている祖霊慰めの祭儀を齋行致しました。

神無月(十月)

四日 観月会 中秋の名月
 *安倍昭恵内閣総理大臣令夫人ご臨席のもと
 と約八十名にて日本酒と共に名月を愛でなが

ら、日本の風土、豊かな四季を大切にしてきた
 伝統的な日本人の「こころ」に思いを馳せまし
 た。

十七日 神嘗奉祝祭
 *伊勢の神宮で新穀が奉られ五穀の豊穣に感
 謝の祈りが捧げられました。この祭典を奉祝
 し当宮におきましても厳肅に齋行され、神宮
 を遥拝致しました。

二十日 秋季例大祭前夜祭
 二十一日 秋季例大祭本殿祭並びにと
 こわか奉納会物産品奉献式
 *神社本庁より幣帛が奉られ、二年に二度の大
 御祭が齋行されました。

二十二日 秋季例大祭御神幸祭
 サイ上り神事
 *当宮創祀者の河野通次を偲び、八五八年伝
 統の無形民俗文化財指定「サイ上り神事」も
 厳かに執り取る事が出来ました。

霜月(十一月)

三日 明治祭
 *戦前の明治節にあたり、四大節(四方(節)、
 紀元節、天長節、明治節)の一つです。明治天皇
 様のご生誕とご聖業を讃えるとともに、皇室の
 更なるご繁栄を祈願致しました。

七日 立冬更衣祭
 十五日 七五三祭
 *お子様の成長をご祭神へご奉告し、ますます
 の健やかな成長を月次祭に併せお祈り申し上
 げました。

二十三日 新嘗祭
 *天皇陛下が五穀の新穀を天神地祇(てんじん
 ちぎ)に勧め、また、自らもこれをお食しあそ
 ばされて、その年の収穫を感謝する古来より

伝わる稲作儀礼の祭儀です。宮中三殿の近く
 にある神嘉殿にて執り行われます。当宮にお
 きましても、新穀をご祭神へお供え致し、収穫
 を神恩に感謝申し上げ、厳肅に執り行いまし
 た。

師走(十二月)

三日 大注連縄掛替神事・煤払式
 *神域と外界とを隔てる拜殿大注連縄の奉製
 が執行され、本年刈り取って干した稲藁を使
 用し、青々しい立派な大注連縄が掲げられま
 した。終了後、煤払式を執行し一年間の汚れを
 掃き清めました。

二十三日 天長祭
 *今上陛下の御誕辰を言祝ぎ更なる皇室の弥
 栄をお祈りする祭典です。天長祭とは、古来、
 唐の玄宗皇帝の誕生日を天長節と祝った事に
 由来します。天長とは老子の「天長地久」とい
 う言葉に由来し「天にとこしえなる事」の意を
 含んでいます。

正月臨時巫女奉仕者説明会
 三十一日 大祓式
 *私たちが日常生活のなかで、知らず知らずに
 犯してしまった罪穢れを人形(ひとがた)に託
 して身体を清め、心新たに新年を迎え生活を
 営むべく心技体を整えます

新守札清祓式
 除夜祭



平成二十九年
新年御供米料
奉献会社ご芳名

〔※順不同、敬称略〕

- 池田興業(株)下関支店
- キャボットジャパン(株)下関工場
- 下関唐戸魚市場(株)
- ジャパンマリン(株)
- 三菱重工業(株)下関造船所
- 山口県漁業協同組合彦島支店
- 山口県漁業協同組合下関南風泊支店
- 西中国信用金庫西山支店
- 山口銀行彦島支店
- 大田造船(株)
- 下関酒造(株)
- 青木鉄工(株)
- 株田原工務店
- 株田原工務所
- タナカ機工(有)
- 株大庭工務店
- 大田造船(株)
- 有マルゲン包材
- 有岩原クリーニング工業所
- 有上釜電機商会
- 株ユキテクノ
- チヨダウーテ(株)下関工場
- 三宅商店
- テーラーしばた
- 香洋工業(株)
- 和日電機(株)
- 株サントー
- 有ライフクリーニング
- 株下関ユアサ建材
- 日新リフラテック(株)
- 関門三協工業(株)
- 有ライス&ミルク上村
- 植田木材(株)
- みなと不動産
- 高保工業(株)
- 株室田組
- 株原工務店
- 三池屋
- 大久保本店
- 有オカダ工房

平成二十九年
節分祭
御協賛会社御芳名

〔※順不同、敬称略〕

- 【設営協賛の部】
- ▼ 舞台花道設営
 - 株新原工業
 - ▼ 照明設備
 - 有タツミ電工

【協賛金の部】

- 下関三井化学(株)
- 彦島製錬(株)
- キャボットジャパン(株)下関工場
- オルネクスジャパン(株)下関工場
- 三菱重工業(株)下関造船所
- 菱重アシリテイ&プロパティズ(株)西日本支社
- サンセイ(株)下関工場
- 有前田造船所
- 東海電機(株)
- 日新リフラテック(株)
- 下関唐戸魚市場(株)
- 協立運輸商事(株)
- 池田興業(株)下関支店
- 西和建工(株)
- アルギン(株)
- ジャパンマリン(株)
- 青木鉄工(株)
- 株田原工務店
- 株ユキテクノ
- 株大田造船
- 株大庭工務店
- タナカ機工(有)
- 西京銀行彦島支店
- 西中国信用金庫西山支店
- 株山口銀行彦島支店
- 株ナカハラプリンテックス

舞台紅白幕を奉納

池田興業(株)彦島支店さん

彦島追町の池田興業(株)彦島支店さんより風雨に強い特殊ビニール製の境内舞台の紅白幕が奉納され三月十三日に村上寛剛支店長はじめ役員参列のもと奉納奉告祭が斎行されました。

巫女体験記 「神明奉仕をして学んだこと」 湊さくら

此の度、ご縁ありお正月の臨時巫女の奉仕をさせていただきました。短い期間ではありましたが、実際に体験をしてみないと分からなかったたくさんさんの事を学ぶ事ができました。

まず、出社して、拜礼をします。そして改服し緋袴を着装し、各自担当に着く前に手水で身を清め、拜殿でお祓いを受けるのですが、手水の作法や正しい参拝の仕方は巫女を体験するまで知りませんでした。また、手水を行う事で、身の穢れを洗い流し、参拝の折に拍手をうつのは、神様に自らが正直であり、何の下心もないことを証明する為であるというような作法に対する目的も学び得ました。

私は、主に縁起物や御守を授与する事を担当しました。最初は授与品の種類と参拝者が想像以上に多くて、焦りと不安がありました。が、間違えなくきちんと無事にお仕えすることが出来たので達成感の方が大きいです。そして、この

際にも、お札の名前や配置の仕方、御守の種類や意味など尋ねられた際にはすぐ答えられるように予め覚えておく必要があります。これらの知識も巫女を体験してみないと分からなかった事です。毎年、お正月は家でダラダラして終わってしまったのですが、元日の早朝から神社に向向き、参拝者に「あけましておめでとう、ございます」と挨拶をして、参拝者が笑顔で返していただけ事は、嬉しく、自信にも繋がりました。

唯一大変だったことは、寒さ対策です。緋袴は薄手で、中に着込んでいても、参拝者との接遇に間が空いた時間は少し寒かったです。しかし、おかげさまで休憩時間になると暖かい部屋、お茶を用意して下さい、とても恵まれた環境で巫女を体験できたことに感謝しています。

最後に、今回臨時巫女体験を通してたくさんの方々の事を学び得たのも、彦島八幡宮の神職の方々、また私たちを御世話して下さいました。短い期間ではありましたが、ありがとうございました。



手水舎「龍の口」を奉納



医療法人社団山口整形外科
山口芳英 先生

彦島江の浦町の医療法人社団山口整形外科 山口芳英 先生より青銅製の手水舎「龍の口」が奉納され、五月二十六日に奉納奉告祭が斎行されました。

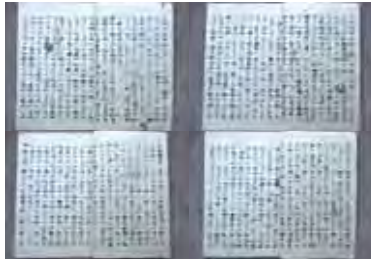
明治維新百五十年記念特集 『廻浦紀略』にみる吉田松陰先生と彦島の御神縁

吉田松陰先生は、嘉永二(一八四九)年七月、二十歳にして彦島を巡検され史実があります。これは、当時露西...

「廻浦紀略」から彦島巡視を抜粋 南風泊に繫船し、小舟に乗り竹の小島に上り、一の臺...

とすれば、直立十四丈の高さなるべし。 福浦を出でて田の首に着船し、山床の鼻、八幡宮の上...

本年は維新百五十年の佳節を迎えました。 維新胎動の地である郷土の歴史を身近に感じ...



「ミステリアスジャパン」や「前川清の笑顔まんてん」タビ好きにはじめ多くのTV番組でも放送された 奇跡を発動する神宿る磐座 彦島八幡宮ペトログラフィ

当宮には古代文字(シヌメール文字)が刻銘された巨岩が奉安され、全国各地より著名人や芸...



安産祈願祭・腹帯清祓のご案内

彦島八幡宮は別名『子安八幡』とも称され、安産の神様としても崇められております。 ご持参頂いた腹帯(マタニティガードル)に...



*平成三十年の戌の日

Table with 3 columns: Date (Month/Day), Day of the Week, and Omikuji result (e.g., 赤勝, 引減, 大安).

祭事暦 平成三十年

- 睦月(一月)**
 - 一日 初太鼓 歳旦祭
 - 三日 元始祭
 - 十四日 どんど焼き
 - 十五日 成人祭(月次祭)
- 如月(二月)**
 - 三日 節分祭追儺式
 - 十一日 紀元祭建国奉祝祭
 - 十七日 祈年祭
- 卯月(四月)**
 - 二十九日 昭和祭
- 皐月(五月)**
 - 五日 立夏更衣祭
- 水無月(六月)**
 - 三十日 大祓式
- 文月(七月)**
 - 二十九日 夏越大祓式・菅拔神事
 - 三十日 夏越祭本殿祭・御神幸祭・海上渡御(かいじょうとぎ)
- 葉月(八月)**
 - 五日 まほろば学級盆期間 中元祭
- 長月(九月)**
 - 七日 摂社若宮神社例祭・平家踊り奉納
 - 二十三日 秋分祭秋季祖霊祭
 - 二十四日 観月祭中秋の名月
- 神無月(十月)**
 - 十七日 神嘗奉祝祭
 - 十九日 秋季例大祭・前夜祭
 - 二十日 秋季例大祭・本殿祭
 - 二十一日 秋季例大祭・御神幸祭
 - 無形民俗文化財「サイ上り神事」午後三時頃
- 霜月(十一月)**
 - 上旬 懸崖・菊花展
 - 三日 明治祭
 - 七日 立冬更衣祭
 - 十五日 七五三祭
 - 二十三日 新嘗祭
- 師走(十二月)**
 - 二日 大注連縄奉製・煤払式
 - 二十三日 天長祭
 - 正月臨時巫女奉仕者説明会
 - 三十一日 大祓式 除夜祭

初詣のご案内

●祈願 各種お祓いを受け付し、多種多様な守札を頒布致します。
 三ヶ日の閉門は午後六時を目安と致します。
 ●元旦限定 開運福引大会
 一枚五〇〇円にて空クジ
 なしです。例年午前中で
 完売致します。
 電化製品、旅行券、お
 米、福袋等々豪華景品
 もりだくさんです！
 皆様お誘いあわせの上、
 ご参拝下さい。



どんど焼き神事のご案内

一月十四日(日) ※荒天の場合二月二十日(日)
 ●忌火点火式 午前十二時頃
 ●正月神饌餅(焼き)のふるまい
 ★注意 どんど焼き以降、正月飾は受け付けて
 おりませんので、ご了承下さい。



節分祭のご案内

二月三日(土)
 ●福引大会 午前〇時〜午後七時三〇分
 ●豆まき ①午後六時三〇分
 ② 七時三〇分
 ●ぜんざいふるまい・露店出店
 ★第二回豆まき奉仕者募集
 厄年、戌年生まれ、受験の方は是非！
 午後七時より合同にて特別祈願齋行後、豆ま
 き奉仕をしていただきます。
 ※詳細は社務所までお問い合わせ下さい
 〈初穂料五千円〉



紀元祭建国奉祝祭のご案内

二月十日(日)
 ●開式時間 午前十時
 ●その他
 どなた様でもご
 参列できます。
 皆様お誘いあわ
 せの上、ご参拝い
 ただき、日本の
 建国記念日をお
 祝い致しますよ
 う。



境内桜の見頃

三月下旬から四月上旬にかけて
 古来、春に里にやってくる稲(さ)の神様が憑依
 する座(くら)だからさくらであるとも考えら
 れています。富士山頂から、花の種をまいて
 花を咲かせたとされる、木花之佐久夜毘売命
 (このはなのさくらやひめのみこと)の「さくら」を
 とってさくらになった、とも言われています。



舟島神社例祭。佐々木小次郎 大人命慰霊祭のご案内

四月十四日(土) 午前十時 於、巖流島(船島)
 本年は決闘より四〇五年。小次郎大人命を偲
 んで決闘や巖流島に纏わる御神楽や剣舞が奉
 納されます。
 ●ご参列、拝観自由(※彦島江浦渡船場から
 無料のチャーター船が運航します)



夏越祭のご案内

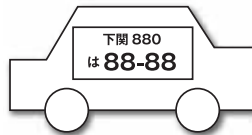
七月二十九日(日)

夏越大祓並びに普抜神事

●夏越大祓 午後五時開式

●大祓人形 人形並びに車形は社頭にてお頒ち致しております。社務所までお気軽にお申下下さい。

人形に氏名・年齢男女の別を記入(※車形の場合は、車のNoプレートも記入)し、息を三回吹きかけ、分魂(わけみたま)を宿らせます。こちらを夏越祭までに社務所までご持参下さい。



七月三十日(月)

夏越祭御神幸祭並びに海上渡御

●御神幸祭 午前八時境内発輿。一年に二度の彦島各町内への御巡幸です。最寄りの御旅所に、ご参拝下さい。

●海上渡渡 午後三時彦島海士郷町の漁港を出船。ご祭神を御座船に奉じた大船団が大海原を進みます。下関漁港内を周遊し南風泊漁港に至ります。らを夏越祭までに社務所までご持参下さい。



☆拝観の見どころ
彦島海士郷町・伊崎町・大和町の岸壁 彦島ナイスビューパーク

まほろば学級のご案内

八月五日(日) ※荒天(台風等)の場合は中止

●時間 午前〇時〜午後七時三〇分

●申込 参加費千円。該当は小学四年生〜六年生。但し、小学三年生以下でも保護者同伴もしくは参加者に兄弟がいたら参加可能です。

●内容 ①雅楽鑑賞 ②紙芝居 ③あんどん製作 ④さうめん流し ⑤花火 他



神社・お祭りの自由画コンテスト
作品募集のご案内

●内容 神社・お祭り・鎮守の森、伝統行事などの風景

●対象 小学校一年生〜六年生・未就学児童(四歳〜六歳)

●用紙 四ツ切り画用紙使用(約35×50センチ程度)

※絵の裏に左記応募票(不足の場合、コピー可)を糊付けして提出してください。

①画題、②氏名(ふりがな)、年齢、学校(園)名、③自宅住所、電話番号を忘れずに記入下さい。

●締切日 平成三十年八月二十日(火)
※彦島八幡宮社務所までお届け願えば幸いです(郵送受付可)。



秋季例大祭のご案内

十月二十日(土)

本殿祭並びに境内奉納行事開催

●神事 午後五時開式

●奉納行事 福引大会、芸能大会、餅まき、各種ハザー、野菜直売会

十月二十一日(日)
御神幸祭並びにサイ上り神事

●奉納行事 福引大会、各種ハザー、野菜直売会

●御神幸祭 午後二時境内発輿

●サイ上り神事

午後三時頃境内大広前



境内紅葉の見頃

十月上旬から下旬にかけて



七五三詣のご案内

※年齢は数え歳表記です。

●受付時間 午前八時三〇分〜午後四時三〇分

●年祝表 平成二十四年生の女子(七歳)

平成二十六年生の男子(五歳)

平成二十八年生の男女(三歳)

●授与品

御守・千歳飴・知恵おこし・お土産袋



つちのえいぬ
平成30年(戊戌)厄年・年祝表

(年祝)

上寿祝	大正 8年生(100歳)	数え年100歳のお祝い。
白寿祝	大正 9年生(99歳)	百から上の一を取ると白になり、数で云えば99である。
卒寿祝	昭和 4年生(90歳)	卒は略字で卒と書き九十と読む。
米寿祝	昭和 6年生(88歳)	米は字をわけると八十八となる。
傘寿祝	昭和14年生(80歳)	傘は略字で傘と書き八十と読む。
喜寿祝	昭和17年生(77歳)	喜は草書で喜と書き七十七と読む。
古稀祝	昭和24年生(70歳)	「人生七十古来稀なり」の漢詩にもとづく。
還暦祝	昭和33年生(61歳)	干支が丁度一巡し、誕生の年と同じになるので本卦返りともいう。

(厄年)

性別	年齢	前 厄	本 厄	後 厄
男	25歳	平成 7年生(24歳)いのしし	平成 6年生(25歳)いぬ	平成 5年生(26歳)とり
	42歳	昭和53年生(41歳)うま	昭和52年生(42歳)へび	昭和51年生(43歳)たつ
	61歳	昭和34年生(60歳)いのしし	昭和33年生(61歳)いぬ	昭和32年生(62歳)とり
女	19歳	平成13年生(18歳)へび	平成12年生(19歳)たつ	平成11年生(20歳)うさぎ
	33歳	昭和62年生(32歳)うさぎ	昭和61年生(33歳)とら	昭和60年生(34歳)うし
	37歳	昭和58年生(36歳)いのしし	昭和57年生(37歳)いぬ	昭和56年生(38歳)とり

ほっほうふさ
(八方塞がり)

皆様一人一人の生年月日により九つの星“九星”に区分され星回りが存在します。中央を基点に、北、北東、東、南東、南、南西、西、北西の方角をめくり、九年に一度中央に入ります。これが八つの星(方位)に囲まれた状態である**八方塞がり**です。

不安定な年とされ、より注意をしなくてはならない年です。

八方除けの祈願や方位除けの御守をお受けになられ、御神慮を恐み慎む事をお勧め申し上げます。

本年は**九紫火星**の方が該当致します。(以下に表記)

昭和3年、昭和12年、昭和21年、昭和30年、昭和39年、昭和48年、昭和57年
平成3年、平成12年、平成21年

※注意:ただし、それぞれ上記の年の立春2月4日～翌年の節分2月3日生まれの方が該当します。



(七五三祝)

祝	平成28年生の男女(3歳)	髪を伸ばし整え始めること。
祝	平成26年生の男子(5歳)	男の子が初めて袴をはき始める年齢。
祝	平成24年生の女子(7歳)	女の子が今までの紐付着物から帯を締める大人の着物に替える年齢。

祈願祭(お祓い)は数え年でお受けしましょう。

「数え年」は、生まれた時点を1歳とし、新年を迎える度に1歳加えて行きます。

これは、正月に各家を訪れる年神様から1つ年を頂くというありがたい意味があります。満年齢に誕生日前であれば2歳、誕生日を迎えた後は1歳を加える解釈となります。

発行所 **彦島八幡宮社務所**
 下関市彦島迫町五丁目十二番九号
 TEL 〇八三二二六六一〇七〇〇
 FAX 〇八三二二六六一五九一一
 ホームページ <http://www.hikoshima-gunnet>

発行者 **柴田宜夫**
 編集者 **山本光徳**

平成三十年一月一日
 印刷・株ナカハラプリンテックス

彦島八幡宮会館 瑞鳳殿の御案内
お食事・仕出しはお任せ下さい

会席料理から各種オードブル、お刺身の盛合せ、御弁当までお気軽にご相談下さい。

(予約センター連絡先)
 TEL 〇八三二二三四一〇七三三(午前10時~午後3時)

▼**当館でお召し上げの場合**
 *洋ホール(二〇〇名様まで対応)
 *和室(十二畳)
 (※六畳2部屋)
 和室(二十畳)
 (※十畳2部屋)
 【和室会席の場合】
 定員(二十五名)

▼**配達の場合**
 *各種様々なお弁当・刺盛・オードブルを配達致します。
 お気軽にご相談下さい。